

---

**もっと力があつたならば それは己の弱さを正当化させる言葉である**

蓮實苑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

もつと力があつたならば それは己の弱さを正当化させる言葉である

### 【Nコード】

N5367G

### 【作者名】

蓮實苑

### 【あらすじ】

淡々と死を目にする主人公。加速する狂気。生が反転するほどの、何か。

もつと力があつたならば それは己の弱さを正当化させる言葉である（前書き）

例えば、そこに遺影が飾つてあつたとします。

その遺影には女性が写っています。

それはとても美しい女性で、こちらを向いて軽く微笑んでいる様はまるで白百合のように可憐です。

けれどそれはやはり遺影で、女性はもう死んだのです。この世には居ません。あの世に居るのかは定かではありませんが。

女性の死因は、腹を刃物で切り裂かれた事によるショック死。

死体は死装束を着せて棺桶に詰めるのがかなり困難なくらい無残な状態でした。

その女性の遺影が、今そこにあります。

貴方は、それを見て一番に何を考えますか。

+++

流血、グロ（惨殺）表現有り

+++

題名はこちらからお借りしました。

「もつと力があつたならば それは己の弱さを正当化させる言葉である」

選択式御題（<http://www.geocities.jp/monikarasu/>）

管理人 最尼花

もつと力があつたならば それは己の弱さを正当化させる言葉である

死にたいのに死ねない人と  
死にたくないのに死んじゃう人は  
どっちが辛いんだろうとか

身体を傷つけるのってどんな感触がするんだろう。

ずっと前から…本当にずっと前から気になっていたんだ。ある日風邪を引いて、注射をしてもらった時から。看護師が顔色も変えずに平然と血を抜き取ったのが印象的だった。静脈にす、と刺さった針。とても綺麗だった。どうして細い血管を突き破る事もせず刺せるのだろう、と。痛くはなかったけど、だからこそこういう行為を他人にした時、どんな気分になるのか気になった。手術で身体を切る時とか、どんな感触が指に伝わるんだろうって。そんなことで頭がいっぱいだった。

そんな時、この国のどこかで惨殺事件があつた。

腹は大きく切り裂かれ内蔵が引きずり出された上にその内臓も微塵切り。医者の話ではその時点か或いは最初に切りつけられた時にショック死していたに違いないらしい。だがその死体の女性は手足は勿論、顔も全て、つまり全身が滅多刺しにされていたそうだ。こんなに酷い事件は他に類を見ないとニュースキャスターは語っていた。遺族は泣いていた。

その手に抱かれた遺影の女性は美しかった。

殺人現場を想像してみた。

真赤な地面に広がる蒼白な肢体。

鉄に脂の生臭い匂い。

顔のない崩れた肉体はどんな格好だったのだろうか。やはり大の字か。それともそこまでの惨殺死体なら手も足も区別がつかないのではないだろうか。ぐちゃぐちゃに潰れ、一種のアメーバのようなのかもしれない。

肉が切れる感覚。甲高い女の悲鳴。飛び散る血液に引きずり出された内臓。日の目を見ることなく一生収められているより、そんな風にして死んだほうが内臓としては嬉しいのではないだろうか。

高校、大学と所属したのはやはり医学部。人が傷ついた時の痛みについて熱心だった。切りつけた側の感触は勿論学べるはずもなかったがそれは毎晩ベッドの中で医学書を読みながら想像し、想像しては想像では駄目なんだという結果が出て、毎回その瞬間疲れて眠っていた。

二度目の惨殺事件があった。

十数年も前の事件と良く似ていたが今度はまず首を切られていた。その後、体中を滅多刺しにされていたのだ。昔は気付かなかったが、どんなにインパクトがあっても十日足らずで人々は事件を忘れるものだ。

だが自分はずっと覚えていた。

「久しぶり。少し痩せたかな？」  
「え？」

目の前の人物は笑顔だ。人懐っこそうで魅力的な笑顔だが見覚えがあるようには思えない。

「え？ 忘れた？ 高校で一緒だったんだけど」  
「…え？」

気分を害したらしい顔をした知人らしき人は、未だきょんとしている自分がおもしろくないらしく、盛大に溜息をついた後で「やっぱり覚えてない」と苦笑いをした。その知人（やはり”らしき人”にしか見えない）の顔をまじまじと見詰めると、まんざら初対面でもない顔かもしれないという気もしてきた。

「ん？ 思い出してきた？」

知人（らしき人）の苦笑いは少し明るくなり、嬉しそうだ。  
ころころと表情の変わる人だと思った瞬間、少し何か頭の淵にひっかかり、どうも知った人らしいぞと思った。

「…あ、なんか……」  
「急ぐな急ぐな。急ぐとまたすぐ忘れるぞ。急がーなーいー」

多分また忘れるとしたらその声のせいだ。  
頭の中で突っ込みをいれつつも着実に思い出してきている。こいつは、高校が一緒に、会話友達止まりの知り合いだ。まあ、そうとはいつてもその辺の会話友達よりは仲は良かった筈だが。どうも思い出した事が表情にでたらしく、目の前の友人の顔は花が散らんばか

りに輝き始めた。

「思い出した？」

「まあ…うん、思い出した」

「やった」

何が「やった」なのか。だが今の自分の反応を思い返してみれば、確かに喜ぶことかもしれない。

今日はどうしたのかと訊くと、目の前の友人曰く「急に会いたくなつた」とのこと。

「ほら、よくあることじゃん。虫の知らせ？って言うの？」

「……多分、違う」

「そ？知らないけどさ。いいじゃん、会えてさ。嬉しくない？」

「……………」

「そこはせめて頷いてよ」

なぜ、と呟くと非常にショックだったらしく俯いてしまった。

どうもテンポが合わない。こんな人間でも中身は全部同じなのか。

「お前、変わらないね」

どうもわけがわからない。変わらないなどこの友人に言われたら終わりだ。

身体を傷つける事への憧れは昔から変わっていなかった。  
寧ろ、憧れはどんどん高みへと上がっていった。

手首を切りつけてみたい、という程度だった想いも。

もっともっと、全てを切り刻んだら、どんな気持だろう、どんな感  
触が手に残るのだろう。

凶器？

凄惨な現場。

その中にひっそりと佇む自分。

真赤に濡れた地面に、真赤に塗れた自分。

血の匂い、脂の匂い。虚ろな黒い目をした、自分。

狂気？

自分はどんな気分で立っているのだろう。

虚ろなんかではなく、目的を達した達成感に溢れた鋭い瞳かもしれ  
ない。

狂喜に歪み、引き攣った頬、喘ぐ喉。その時自分は、どんな風に笑  
うのか。

憧れ、狂喜。

それは、確信へ。



三度目の惨殺事件があった。

まず頸動脈に凶器である刃物を刺し、引き抜き、次に腹。腹は大きく切り裂かれ内蔵が引きずり出された上にその内臓も微塵切り。首の断面は何かで醜く挟られていた。恐らく犯人の爪だ。死体の手足は勿論、顔も全て、全身が滅多刺しにされていたそうだ。大半の傷口はやはり同じく爪で挟られ、余計に出血を酷く、組織は滅茶苦茶だったらしい。

十数年前の事件、最近起きた事件と酷似していたが、一つだけ異なったことがあった。

凶器を持った犯人が、その場に立っていた。

血飛沫が上がる。顔に、身体に。血飛沫がこれでもかとかかる。意識はなかったため、悲鳴は無い。そして頸動脈を一突きしすぐに抜いたため、ほぼ即死。凶器を通して、肉の切れる感触が手へ。そして脳へと導かれる。とんでもない快楽を覚え、思わず断面に爪を立て、指をめり込ませた。ぐじゅ、ぶしゅ、と、肉が崩れる音、血が飛び出す音が聞こえた。脂で滑るが、なかなかいい。死にたてで体温は充分残っている。温かい。一頻り断面を弄ぶと、腹へと凶器をつきたてた。縦に大きく切り開くと、途端に生臭い内臓が飛び出して少し面食らった。

『 日、未明、 で惨殺事件が 』  
ニュースキャスターの青い顔を想像し、笑みが零れた。

自分は、人を殺した。

歡喜に身を任せ他人の身体を滅多刺しにする。

余すところのないように。大胆に振り下ろしながらも、慎重に、贅沢に。

一頻り刺し終え、内臓も微塵切りにしてしまうと、凶器はもういない。

あとは、自分の手で。

『 日、未明、 で惨殺事件が 』

テレビに、顔写真が写っていた。

こんな狂ったような犯罪を考える人間は一体どんな顔をしてるのだろうかと画面をしげしげと見詰めると、それは友人だった。

「まさか…」

そんな筈は無いと思った瞬間、先ほどニュースキャスターが「凶器を片手にその場にいた」と述べていた事を思い出し、儚い望みは消え去った。昔から、変な人だとは思っていた。

それでも、こんなこと。

いや。有り得る。普段から思っていたではないか。こいつは、何かおかしいと。

昔、話の拍子に聞いた事があった。「人を傷つける感覚って凄いだろっね」と。

笑って流したが、本当はずっと気にかかっていたのだ。

高校時代も、今までも、ずっと。

どうして気付かなかったのだろう。

大学の医学部へ進学したと風の噂で聞いた時点で、すぐに会いに行けばよかったのだ。

この間再会したのも、本当はそのことに関して何か言いたかったのだ。

だが、会ってみると何も変わっていないく、途端に懐かしくなり、なんでもない雑談をして去ってしまった。

どうしてだ。どうして、気付かなかった。

変わっていなかったのは間違っていない。変わるようなら最初から心配することはなかった筈だ。

変わらない奴だからこそ直感的に心配して、わざわざ下手な口実を作ってまで無理矢理会いに行った。

そこまでわかっていてどうして、気付かなかったんだ。

「人を傷つける感覚って凄いだろっね」

あの会話をしていた時点で、あいつが狂っていた事に。

死刑は決まったも同然だ。

被害者は一人。けれどこんなにも残酷な事件で、しかも犯人の意識がはつきりとしていれば、当然の事だろう。

長く語り継がれる　　なんてことはないのだろう。

どんなに卑劣で、残忍でも、人はそう簡単に一つの事に執着できるものではない。

だからきつと、自分もあいつを忘れてしまう。

もつと力があつたならば

それは己の弱さを正当化させる言葉である

「お前、  
変わらないね」

もつと力があつたならば それは己の弱さを正当化させる言葉である（後書き）

例えば、そこに遺影が飾つてあつたとします。

その遺影には女性が写っています。

それはとても美しい女性で、こちらを向いて軽く微笑んでいる様はまるで白百合のように可憐です。

けれどそれはやはり遺影で、女性はもう死んだのです。この世には居ません。あの世に居るのかは定かではありませんが。

女性の死因は、腹を刃物で切り裂かれた事によるショック死。

死体は死装束を着せて棺桶に詰めるのがかなり困難なくらい無残な状態でした。

その女性の遺影が、今そこにあります。

貴方は、それを見て一番に何を考えますか。

女性を悼んで悲しみますか。

女性の冥福を祈りますか。

遺族を慰めたいですか。

犯人を恨みますか。

女性の死に様を思い浮べますか。

……………。

このお話は、そんなほんのちょっとした感性の違いが引き起こした悲劇です。

この主人公は、ほんの少し周りと命についての受け取り方が違っただけに、間違つた道を進んでしまします。

その違いはほんとに些細なもので、友人も、教師も、家族でさえも気付いてあげる事ができませんでした。

扇の端は点でも、外側はとても大きいのです。

進んで、加速して、終点を迎えたそれは、他人を殺すという形で爆発してしまいました。

主人公は一体何故こんなにも他人とずれているのか。

いいえ、この主人公があまりにも他人とずれすぎているように見えるのは、このお話が主人公視点だからです。

誰だって他人とずれているのです。この主人公だけではありません。地球上の誰もが、ずれているのです。

この主人公だって、甘いものが大好きかもしれない。

対人関係がうまくいかなくて、こんなこと考える余裕も無く酒を飲む日もあったかもしれない。

耐え切れなくなって、くしゃくしゃの顔で泣きじゃくったかもしれない。

それでも仲直りして、満面に笑みを湛えて笑い合ったかもしれない。

主人公だって人間だったんです。ただ、命についての受け取り方が、社会に居る大勢とほんの少し違うだけの。

だからこそ、幼い頃に芽吹いた狂気の芽を誰にも見つけてもらえず、大きな実がなってしまった。

それはとても醜くて、恐ろしくて、悲しい味。

このお話を書こうと思ったきっかけは、ネットサーフィンの途中で見つけた、

いわゆる「お題サイト」というところで見かけたお題があまりに印象的で美しく、儚く、それでいて強い言葉で、

その時頭の中にあつた「殺人」というワードと重ねると、あまりにも簡単に話の構成が思い浮かんでしまったことからです。そのお題とはもちろん、題名になっている「もっと力があつたならば それは己の弱さを正当化させる言葉である」です。

後書きもそろそろ終わりにしようと思います。

最後に、ここまで読んでくださった皆様、話の構成の上で私に協力してくれた皆様、快くお題を使用する許可を出してくださいだった管理人様、本当にありがとうございました。

いつかこの話の続き、もしくは長編での書き直しをしようと思っています。

そのときは、主人公の生い立ち、友人の生い立ち、二度の惨殺事件、そしてその加害者、被害者、全てを書きたいと思っています。

この話では友人や被害者その他、主人公でさえも名前、一人称、生い立ち全て描いておりません。

これは“似た人”がでないようにというのがありますが、誰にでも感情移入してもらえるように、という願いも込めてあります。

主人公は、世界中に居ます。

誰にも止めてもらえず、自分でも自身の狂気に気付かず、最後には最悪の結果を出してしまう。

そんな悲しい主人公たちが、世界中に居ます。

どうか、彼らを、救ってやって欲しい。

私は、そんな思いを胸に、このお話を書き上げました。

こんなにも頑張った主人公だから。

あなたが主人公になつてしまわないように。



「もっと力があつたならば それは己の弱さを正当化させる言葉である」

蓮實苑

お題提供

選択式御題 (<http://www.geocities.jp/monikarasu/>)

管理人 最尼花

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5367g/>

---

もっと力があつたならば それは己の弱さを正当化させる言葉である

2011年1月16日08時13分発行